The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>藤田治彦『ナショナル・トラストの国　イギリスの自然と文化』淡交社 1994 139P
Author(s)	足立, 裕司
Citation	デザイン理論. 1995, 34, p. 152-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤田治彦『ナショナル・トラストの国――イギリスの自然と文化』

淡交社　1994　139P

足立　裕司／神戸大学

日本各地から伝えられる自然や歴史的環境の破壊の報道を聞くとき，いつも思い出されるのがイギリスのナショナル・トラストである。経済大国と言われながら文化的な認識においては日本は何と低く，それに比べるとイギリス病とか陰口は叩かれても生活や環境の質を高めていくことに着実な歩みを示しているイギリスに敬服せざるをえない。藤田治彦氏著の『ナショナル・トラストの国――イギリスの自然と文化』はそんなイギリスの生活のレベルを遺憾なく示している一著である。

ページを広げて，まずその素晴らしい写真に眼を奪われる。何と美しい国だろう。近代化遺産といわている工場や橋といった実用構築物でさえ美しく齢を刻んでいるかにみえる。そして，自然，城館，庭など保存されているジャンルごとにまとめられた総てのプロパティ（資産）にゆっくりと目を通し，簡潔だが含蓄のある解説を読み進めるなら，イギリス人の文化や自然に対する考えや価値観がよく理解されるだろう。その豊かさに圧倒されつつも，やがて否応なしに日本との違いを考えてしまう。確かに日本にも素晴らしい自然や歴史的環境が残っている。ただ，その残り方，残し方がいかにも異なる。日本では自然でも建物でもほとんど官主導の結果として残っているのに対し，ここではイギリス人の身の回りの環境が大事にされている。それは国の名誉や財産といった性格のものではなく，先ずもって自分たちの地域文化や身の回りの生活環境を守ることから生まれてきたものだということを理解しておく必要があろう。

自然を都市の残余として考えるのではなく，都市そのものの対極に位置し，しかも都市の存続にとって必須のものとして捉えるイギリス人の考えが伝わってくるように思われる。それは歴史的環境についても示唆に富む。歴史的継続を発展の過程で置き去りにしていく日本と，生活の内容や質を継続的に捉えようとするイギリスというようにあらゆるところでその価値観の違いに驚かされる。

しかし，このイギリスといえども19世紀には自然も破壊し，都市にもスラムが蔓延したことは忘れられない。ラスキンやモリスが産業化のもたらす惨状を嘆き，抗議したことは誰もが知るところである。しかし，3人の有志がその具体的な抗議を現実のものとし，さらにその展開としてイギリスの環境の保全のプログラムを完成したことをみるなら，今の日本は西欧にただ遅れているだけとは言い切れない不安が残る。文化や自然を精神化し，万物は移り変わるものとして諦める日本人の発想では，こうした運動はいつまでたっても完成しないのではないか。

巻末に手際よく，ナショナル・トラストの概要が紹介されている。それをみるなら，現在の保存地域だけでも日本の小さな県域に匹敵し，参加者や予算規模も日本の文化庁の建造物保存と比較できる規模であることがわかるだろう。これほどの規模を抱える組織が，積極的なボランティアに支えられ，市民の寄付で運営されていること自体，日本との差異を見せつけるものであろう。トラストの働きかけがあったとはいえ，政府がそれを税制や法律面でバックアップしていくという市民運動のお手本のような成果がここにある。天神

崎や全国町並みゼミナールなど日本の市民運動が低いのか，それとも総てを官主導でしか物事が動かない日本の政治システムに問題があるのか，その根は決して浅くはない。

ともあれ，イギリス人の自然観や生活の理想といったものを味わうには恰好の書ではないだろうか。特に3章以降は氏の専門でもあり，示唆に富む。絵画と庭園，自然と住宅，伝統と近代など，それぞれのプロパティの説明からイギリス人の価値観を汲むことができよう。1000を越えるすべてのプロパティを取り上げるのは無理だとしても，できれば世界遺産にもなるような一級のものだけではなく，もう少し身の回りの環境にまつわるやや平凡だが生活観の滲むものも対比的に取り上げてもよかったのではないだろうか。おそらくそうした底辺の広がりがこの書で取り上げられたような一級のプロパティを支えているように思われるからである。

ところで，やや蛇足ではあるが，最近ではナショナル・トラストのグッズが在阪の百貨店でも売られている。女性や子供だけの興味に終わっては困るが，市民運動とは異なる側面からの関心も持たれはじめているだけに，正確な運動の姿を伝える書がタイムリーに出されたことを歓迎したい。日本にはナショナル・トラストを冠するグループが幾つかあるが，この百貨店がバックアップするグループでは，毎年ボランティアの養成のための補助もしているとか聞く。阪神大震災に再認識されたボランティアの輪が広まり，自然や歴史的環境への保護に関心をもつ人々が増えていくことを願わずにはいられない。